

中央大学法科大学院が開校 全国最多の出願者、計409人が合格

中央大学法科大学院が4月1日開校した。これに先立ち開校記念のシンポジウムと祝賀式・パーティーが3月20日、都内のホテルニューオタニで開かれた。終面にグラビア写真。

シンポジウムでは法科大学院の柏木昇、小島武司両教授、加藤新太郎司法研修所上席教官の基調報告のあと、パネルディスカッションが行われ、日本型法科大学院の課題や展望について期待をこめた議論がつづいた。のちの祝賀式・パーティーには稲葉大和・文部科学副大臣、高村正彦、保岡興治・両元法相（ともに本学出身）、さらに麻生太郎・総務相も来賓で出席し、開校を祝った。

4月開校する法科大学院

は全国で68校を数えるが、中央大学法科大学院の第一次選抜出願者数は法学既修者、未修者計5413人ののぼり、全国トップだった。第二次選抜で法学既修者309人、未修者100人が難関を突破し合格した。合格者の平均年齢は28.4歳。出身大学でみると、

商学部3年、 岡嶋大城さんが入賞 土光杯全日本学生弁論大会



1月10日、都内で「第20回土光杯全日本学生弁論大会」（サンケイフジグループ主催）が開催され、中央大学商学部2年（現3年）、岡嶋大城さん（写真）が、「フジテレビ杯」を受賞した。昨年は法学部、渡辺一

実さんが「土光杯」を獲得しており、中大生の2年連続入賞になる。

岡嶋さんの弁論テーマは「自衛隊を正式な軍隊に」。

今回のイラク派遣によって、犠牲者が出た場合に、その死が正当に評価されなければ、二重の悲劇が生まれてしまう。そうなる前にわたしたちは自衛隊を軍隊としてその存在と必要性を明確にすべきだ、などと訴えた。

岡嶋さんは滋賀県出身。意外にも、辞達学会に所属の経験はなく、弁論大会への応募も今回初めてだったという。

「口頃からタイムリーな話題には興味があり、自衛隊のことも本を読んだり、講演を聞いたりしていました。応募は、偶然見つけた新聞の記事がきっかけ。まさか本選に行けるなんて……」と打ち明ける。

応募総数100人の中で、

壇上に立てるのは18人。大会当日は約800人が聞き入った。さぞ、緊張したのでは？

「まあスピーチはそうでもなかったんですけどね。なんせ友達30人も招待した手前、ただじゃ帰れんな、と。賞は上位3つという時は、桶だけでも貰って帰ろうかと、ほんま手に汗でしただわア」

「フジテレビ杯」で名前を呼ばれた時は「ホッとしましたワ」と、関西弁に実感がこもる。「他の出場者を見て、自分ももっと勉強を積んでいかないと、と改めて感じました」とも。

語り口がどことなくユーモラスで、電話の音が明るい。今後の目標を、こう語った。「特に辞達学会などには入らず、これからはフリーな立場でいろんな人の話を聞いて、積極的に弁論大会にチャレンジしていきたいです」（学生記者 津江瞳）

本学出身 初当選の代議士2氏が来校 民主党 小林千代美氏と寺田学氏

本学出身の衆院議員でともに民主党の小林千代美氏（35歳）＝写真左＝と寺田学氏（27歳）＝同右＝が2月10日、初当選のあいさつを兼ねて来校し、角田邦重学長、三宅邦彦常任理事らと懇談した。

小林議員は92年法学部政治学科卒。昨年11月の総選挙で北海道5区から2度めの出馬、選挙区では惜敗し



たが北海道比例区で初当選を果たした。寺田議員は01

年経済学部産業経済学科卒。秋田1区でみごとに新顔当選、自民の牙城・秋田で唯一の民主議席を獲得した。

最年少議員でもある。

1号館役員会議室で、角田学長が当選を祝いつつ「お若いですね」と声をかけると、「若いのは寺田さんで、私のほうはもう若い

ないのですが」と、笑いながら小林議員。「民主党は20～30代の議員が多く、20代も4人います。若い政党なんです」と寺田議員は政党のPRも。大学時代の思い出話や法科大学院の話題、また国会事情などについて話はずんだ。

ちょっと聞きづらいことも聞いてみた。

古賀潤一郎衆院議員（民主党除籍）の学歴詐称事件が尾を引いていた時期である。どう思いますか？

小林議員「どうして学歴

にそんなにこだわるのかしら。学歴詐称自体は大した問題じゃないと思うけど、その後の対応がまずかった。間違いでした、と素直に謝ればよかったのに、と思いますよ。学歴至上主義が問題ですよね」

——自衛隊のイラク派遣承認の本会議採決で、民主党は衆・参院とも欠席（2月）。党議拘束がなかったとすれば、どう対応されましたか。寺田議員「もちろん欠席というやりかた自体には不甲斐なさを感じるけど、本会議にいくまでの手続きが

雑で理不尽だった。党議拘束がなくても欠席したと思います」

小林議員「選挙区に、イラクに派遣された自衛隊員のご家庭も多いんです。だから『欠席』だけで済む問題ではないのですが、一連

の強引な審議経過をみれば、

他に方法がなかったのも事実です」

いきなり難しいこと聞かれるとは思わなかった、と小林議員には二つまれたけれど。

国政の場での清新な活躍を期待したい。（学生記者 西原香保里）

21世紀の科学技術と人づくり 白川英樹博士が講演

中央大学と文部科学省の合同主催での特別研修コース「電子社会システムと情報セキュリティ」の特別講演として、ノーベル賞受賞



者である白川秀樹名誉教授の講演が行われた（昨年12月21日）。

理工学部3号館のホールは、補助席も使うほど聴講生で満員。いつもの温和な表情で、白川博士は語りはじめた。

「20世紀は『科学技術の世紀』でありました。科学技術の進歩に伴い先進国の人々に豊かな生活と長寿を与えましたが、一方では、地球環境をおびやかしました。科学技術は功罪ともに

抱え持っていたのです。21世紀は『知の世紀』でありたい。そのために大学が果すべき2つの使命があります。第一に、自由な発想による教育で個性的な創造性を育むこと。第二に、知的財産の拡充をはかること。大学での知を社会に示し、開かれた大学として自立性と研究の自由を保持するべきなのです」

こんなエピソードも語ってくれた。昔、まだ研究生だったころ、取り組んでいる研究について「お前には道楽をさせてやっている」と教授から文句を言わ

れたことがあった。そこで「真理を追究しているのであって断じて道楽をしているのではない」と言い返した、という。こんな経験もあって、博士は大学は「象牙の塔」でなければならぬ、とも主張する。

「これからの大学教育において必要とされる教養学、複数専攻、文理融合。そのために自然科学と人文社会科学の交流を円滑にしなればなりません。学生には自分なりによく考えさせるとともに、コミュニケーション能力を育てましょう。そのためには知識偏重を排

し、自然に親しむ教育が必要なのです」

未来へ向けた大学のビジョンと人づくりの指針を示した。

◇

白川博士は、ポリアセチレンという絶縁体であるプラスチックに他の物質を微量加えて、性質を変化させる「化学ドーピング」により導電性プラスチックを発見。この「導電性高分子の発見と開発」の業績により2000年度ノーベル化学賞を受賞した。

(学生記者 原田成二理工学部3年)

「勝ち組」キヤノンの経営哲学披露 御手洗富士夫社長が初の母校講演

日経産業新聞が昨年10月行った調査で、国内主要企業の社長、COEが選んだ「最も尊敬される経営者」は、カルロス・ゴーン日産自動車社長らを抑えて御手洗富

士夫・キヤノン社長だった。

その御手洗氏を迎えて、経済学会と経済学部による講演会が多摩キャンパスで行われた(昨年12月9日)。

御手洗氏は、1961年

中央大学法学部卒。79年

89年キヤノンUSA社長、95年からキヤノン社長として、「勝ち組」とよばれるキヤノンの躍進を率い、昨年12月期連結決算も4期連

続最高益を更新した。日本経団連副会長でもある。



母校の後輩にあたる学生ら約1300人を前に、御手洗氏は躍進につながる具体的な取り組みや業績数字をあげながら、キヤノン独自の経営哲学を披露。

キヤノンは、「終身雇用」と同時に「年功序列」によらない実力主義」という日本流プラス米国流の経営で知られる。この点について御手洗氏は「日本流、米国流は文化や商習慣の違いによるが、基本はそれが合理的かどうか、だ。終身雇用と実力主義は創立当初からの、

キヤノンのDNAともいえる」と、37(昭和12)年ベンチャー企業としてスタートした歩みも交えて語った。また、改革の時代に触れて、「第1のグローバルゼーションは明治時代で、いまは第2のグローバルゼーション。日本も(結果平等)ではなく(機会均等)へ、公平・公正の競争原理を取り入れる方向へ改革しなければ欧米に対抗できない」と強調し、熱のこもった講演が続いた。

母校では初の講演。「どんな学生生活を」と会場からの質問には、「勉強はあまりしなかったな。ぼくらが通った駿河台は狭かったが、ここの多摩は広いしきれいだね。びっくりしました」などと、「世界の経営者」が学生のころに戻ったような表情でリラックスした交歓風景も見られた。

(学生記者 江部理恵II 法学部4年)